

延岡市文化財調査報告書 第8集

# 上南方地区遺跡

— 県営園場整備事業上南方地区に伴う埋蔵文化財調査概要報告書 —

中尾原遺跡

畑山遺跡



1992.3

延岡市教育委員会

# 序 文

この報告は、県営圃場整備事業上南方地区に伴い、国県補助と東白杵農林振興局からの委託を受けて埋蔵文化財発掘調査を実施し、記録にしたものです。

発掘調査は、平成元年度から平成3年度にかけて実施され、その面積は中尾原遺跡、山口遺跡、畑山遺跡あわせて約 30000㎡にも及び市内で最大規模のものとなりました。

発掘調査によって、竪穴住居跡約70軒をはじめ、土壇約 150基、掘立柱建物跡数10軒、鉄製釣り針など数多くの資料が発見されました。今後、これらの資料が延岡の古代史の解明の足掛かりになるものと期待されます。

最後になりましたが、発掘調査にあたって、宮崎県教育庁文化課、東白杵農林振興局、上南方地区土地改良組合、地権者の方々など関係各位のご理解とご協力に対し心から感謝の意を表します。

平成4年3月

延岡市教育委員会  
教育長 松坂 数男

# 例 言

1. 本書は、県営園場整備事業上南方地区に伴い、延岡市教育委員会が事前に発掘調査を実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、中尾原遺跡を平成3年6月3日～同年8月23日、畑山遺跡を同年9月26日～平成4年3月31日まで実施した。
3. 発掘調査については、中尾原遺跡を山田聡が担当し、畑山遺跡を県文化課谷口武範が担当した。
4. 本書に使用した遺構の実測及び写真撮影については山田、谷口が担当した。
5. 本書に使用した遺物の実測、トレース、図面の作製については甲斐佳代、敷石サヨ子、高橋京子、山田、谷口があたった。
6. 本書の執筆は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを山田が、Ⅳを谷口があたり、編集は山田があたった。
7. 本書に使用した方位は、磁北を向いている。
8. 出土遺物は、延岡市教育委員会にて保管している。

# 目 次

Ⅰ はじめに	1
Ⅱ 遺跡の位置と環境	3
Ⅲ 中尾原遺跡の調査	8
Ⅳ 畑山遺跡の調査	13

# I はじめに

## 調査に至る経緯

延岡市内では、岡元町、細見町、小川町において昭和61年度から県営圃場整備事業が開始されており、それに伴う埋蔵文化財発掘調査は平成元年度から実施されている。

平成2年9月、東臼杵農林振興局から平成3年度事業予定地について、文化財の有無について依頼を受けるに至り、県文化課による試掘調査が実施された。その結果、遺跡が広範囲に所在することが明らかになった。このため、県文化課、東臼杵農林振興局、市教育委員会による文化財の取り扱いについて協議を行った結果、現状保存が困難なことから、埋蔵文化財遺存地区の中で、事業実施に伴って削平される区域の発掘調査を実施して記録保存することになった。

発掘調査は、延岡市教育委員会が平成3年6月3日から平成4年3月31日まで実施した。

## 調査の組織

調査主体	延岡市教育委員会
教育長	松坂数男
社会教育課長	松島 崇
文化係長	沖米田俊雄
庶務担当	吉永 綏子
調査員	山田 聡 谷口武範（県教育庁文化課主任主事）
特別調査員	大塚誠（宮崎大学農学部教授）
調査補助員	松林豊樹（琉球大学学生）
調査作業員	甲斐カツキ、甲斐暁、工藤幸一、工藤今朝子、久保利男、酒井巖、酒井カノエ、酒井清子、酒井茂夫、酒井初枝、酒井テルコ、酒井正志、酒井義徳、酒井ミサ子、白石睦子、林田裕子、牧野昭徳、小野愛子、小野行助、小野フジノ、小野操、甲斐伊之吉、甲斐カズ子、甲斐基市、甲斐千枝子、甲斐照子、甲斐俊明、甲斐富美子、甲斐ミサ子、酒井キミコ、酒井悦子、白羽根信江、藤川辰江、藤川千尋、三星隆男、山岡勝、吉本良子、
資料整理	甲斐佳代、敷石サヨ子、高橋京子

この他に、延岡史談会の白石征八郎氏、郷土史婦人学級まがたまなどのご協力を得ました。



第1圖  
周辺遺跡分布圖

- |               |            |            |          |
|---------------|------------|------------|----------|
| 1. 柏田遺跡       | 2. 柴竹遺跡    | 3. 細見古墳    | 4. 中尾原遺跡 |
| 5. 山口遺跡       | 6. 畑山遺跡    | 7. 千葉遺跡    | 8. 黒土田遺跡 |
| 9. 貝ノ畑(上貝地)遺跡 | 10. 貝ノ畑遺跡群 | 11. 多々羅遺跡  |          |
| 12. 下舞野遺跡群    | 13. 赤木遺跡   | 14. 上舞野遺跡群 |          |
| 15. 苺田塚跡      | 16. 平遺跡    |            |          |

▲……国指定南方古墳群

## II 遺跡の位置と環境

延岡市は、宮崎県北部に位置し、五ヶ瀬川の下部に開けた有数の工業都市である。

市内における文化財調査の歴史は古く、江戸時代の延岡藩主内藤政昭（1776～1802）にはじまる。彼は居宅である西ノ丸（現内藤記念館）から採集した土器をきっかけに、大貫町浄土寺山の古墳（現国指定南方古墳群第24号墳？）などの調査を行い、「集古標目」「集古採覧」（戦災により焼失）として記録を残している。明治維新前後に活躍した延岡藩家老原時行は、延岡周辺の考古資料を収集し、その中には吉野町出土とされる石剣がある。その後、彼の影響を受けた有馬七蔵は、小学校の代用教員時代に天下町字今井野（延岡植物園周辺）で縄文から古墳時代にかけての遺物を多数収集し、有馬コレクションとして学界に広く知られるようになったが、戦災により全て焼失している。大正から昭和初期にかけては、東京大学講師鳥居龍蔵による南方古墳群、延岡古墳群の発掘調査が実施されている。調査は大正14年10月から昭和4年7月にかけて、のべ3回にわたり浄土寺山古墳をはじめとする市内で主要な古墳が調査され、その成果は「上代の日向延岡」として出版され、現在でも重要な文献となっている。戦後の宮崎県における考古学研究は、石川恒太郎（宮崎県文化財保護審議会委員）の功績によるものが大きく、市内でも苺田窯跡、貝の畑遺跡など数多く調査され、「宮崎県の考古学」「延岡市史」などに紹介されている。

上南方地区遺跡は、市内西部の細見町、小川町に位置し、五ヶ瀬川左岸の標高約50㍍の台地上に所在する中尾原遺跡、五ヶ瀬川支流の細見川左岸にある標高約18㍍の沖積地に広がる山口遺跡、細見川左岸の標高約45㍍の丘陵縁辺に所在する畑山遺跡からなっている。周辺には、旧石器時代～古墳時代まで多くの遺跡が分布している。以下時代別に概観する。

旧石器時代は、東方約1キロに位置する舞野町赤木遺跡が著名である。ここからは、瀬戸内技法がみられるナイフ形石器文化の赤木第1文化層、細石器を中心する赤木第2文化層が確認されている。縄文時代早期は、上舞野遺跡群、黒土田遺跡など南方地区の畑作地のほぼ全域からチャート製石鏃、剥片類の他、押型文土器類がみられ、後期～晩期になると打製石斧、磨石、石錘等の表採資料は急増する。弥生時代は、下部部に位置する古川町で椀切り穿孔をもつ石包丁が出土している。また時期は確定できないが、岡元町柴竹地区で開墾中に壺（現在は不明）に入った炭化米（ジャポニカ種）が出土している。貝の畑遺跡では弥生後期後半とみられる堅穴住居跡1軒を検出している。古墳時代になると調査箇所が増え、箱式石棺を中心とする南方古墳群舞野支群、多々羅遺跡、細見古墳をはじめ、平成元～2年度調査の中尾原遺跡、山口遺跡等があげられる。古代～中世は、10世紀中頃の苺田窯跡が知られている。




第2図

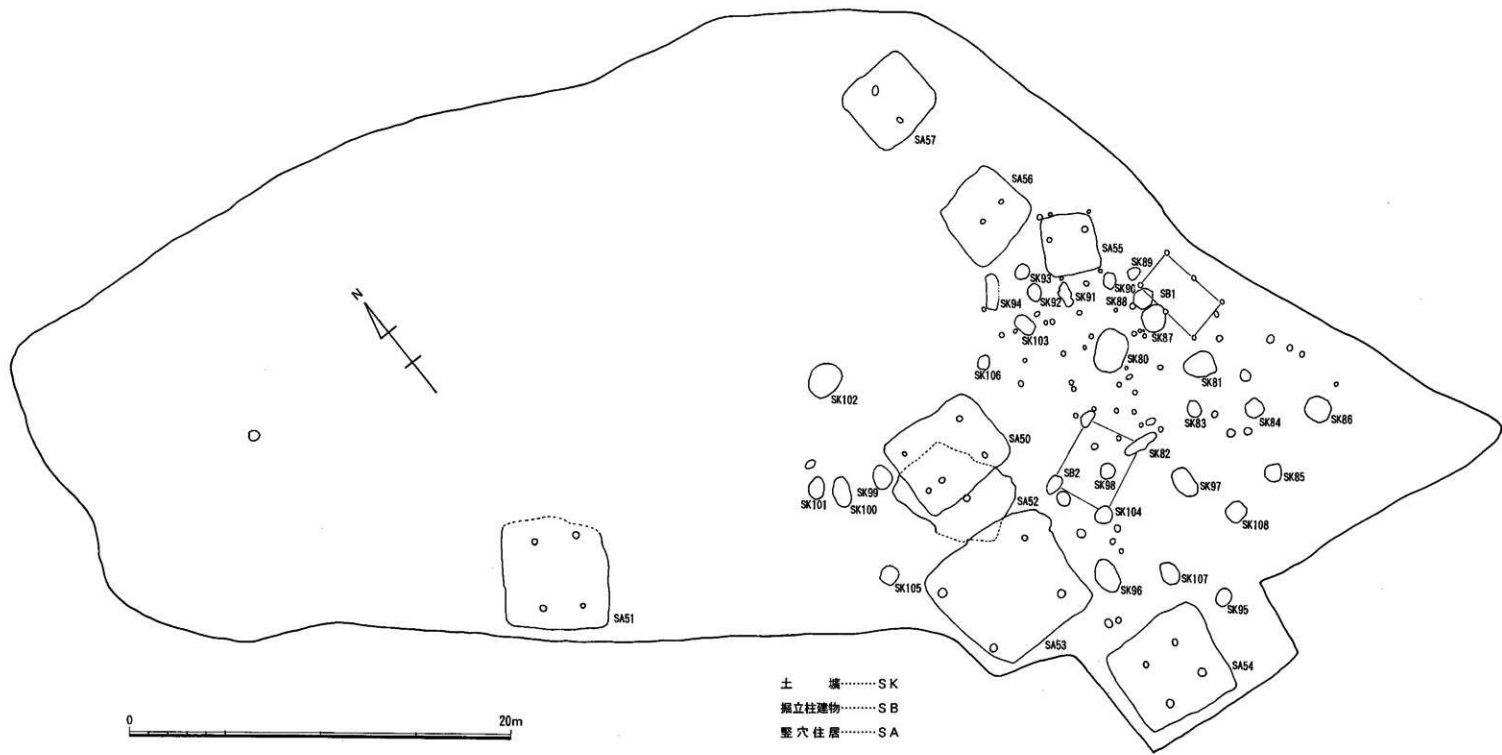
調査区位置図

1. 山口遺跡      2. 細山遺跡      3. 中尾原遺跡

 元年度調査区

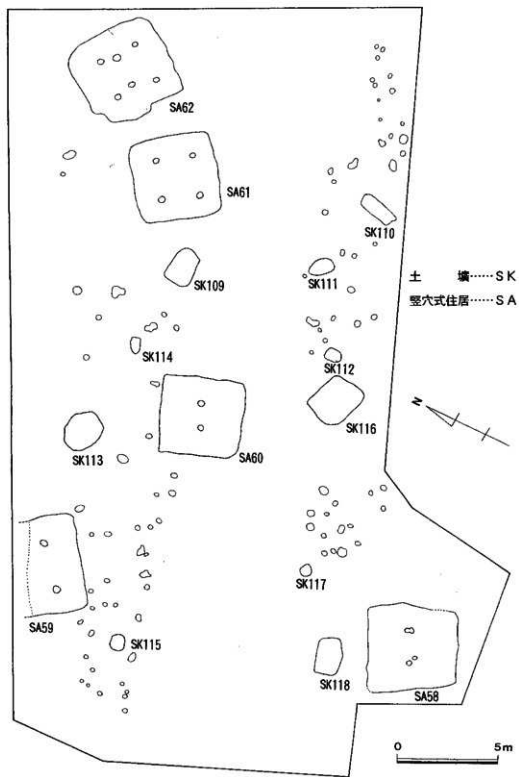
 2年度調査区

 3年度調査区



第3図 遺構分布図(第5区)





第4図 遺構分布図(第6区)

### III 中尾原遺跡の調査

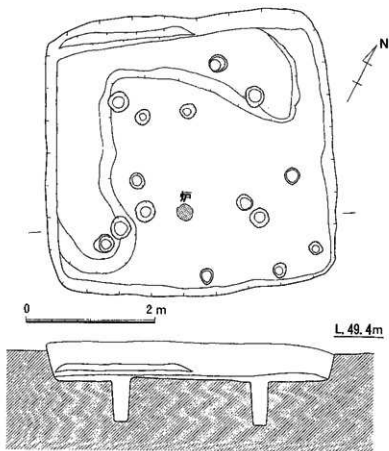
#### 調査の概要

中尾原遺跡は、平成元年度から発掘調査が実施され、これまでに弥生後期後半～古墳時代後期の集落跡を中心として、旧石器時代から古墳時代後期にかけての遺構、遺物が出土している。旧石器時代は、A T上位から集石遺構、ナイフ形石器、三稜尖頭器、剥片類が出土している。縄文早期では、遺構は検出されていないが、チャート製石鏃等が出土している。縄文時代後期～晩期では約80基の上墳が検出され、打製石斧、石錘、御領式土器、黒色摩研土器等が出土している。弥生時代～古墳時代初頭では、堅穴住居跡46軒、土壇数基、柱穴群が検出され、鉄製釣針、鉄鏃、鉄斧、磨製石包丁、甕、壺、鉢、高坏等が出土している。古墳時代後期では、堅穴住居跡3軒が検出され、須恵器、土製勾玉、土製丸玉等が出土している。

今年度の調査は、2年度調査区の南東に位置する第5区（約2200㎡）、北東に位置する第6区（約800㎡）の2ヶ所について実施した。調査の結果、堅穴住居跡群が今年度調査区にも広がることを確認された。検出遺構は、縄文後期～晩期の土壇約35基、弥生後期後半～古墳時代初頭の堅穴住居跡10軒、掘立柱建物跡2棟、土壇1基、古墳時代後期の堅穴住居跡3軒が検出された。堅穴住居跡は1辺約3～6mの方形プランで、支柱穴は2本と4本がみられる。第5区南東部で検出された2号掘立柱建物は1間×1間であるが、ピットの直径約50～70cm、深さが約110～120cmみられることから、やや大型の建物があったことが推察される。出土遺物は、打製石斧、石錘、磨製石包丁、打製石包丁、滑石製紡錘車、須恵器、小形丸底壺、複合口緑壺、甕、鉢、高坏等がみられる。

#### 堅穴住居跡

第6区北東部で検出された第61号住居跡である。1辺4.3～4.4mのほぼ正方形プランを呈し、北西から南西にかけて溝状の窪みがみられる。遺構検出面であるアカホヤ層から床面まで約50cmを測り、床面に4本の支柱穴が認められる。床面中央部からやや南側には炉跡とみられるものが検出された。その構造は、暗褐色粘土で推定直径約40～50cm、高さ約25cmの高まりを作り上面は摺鉢状に成型し、中に完形の鉢形土器を設置している。土器の周囲には、胴上半部まで固形化した焼土が覆っており、内面底部には若干ススが見受けられる。また、同じ第6区の2軒の住居跡では、ほぼ同様の構造をもち、設置する土器が完形品でなく、口縁部から頸部までのタイプ、胴部だけのタイプがみられた。これらは、これまで類例がみられないことから、今後共存する遺物の整理をしたうえで、住居の機能・用途、集落全体からの位置付け等について十分検討する必要がある。



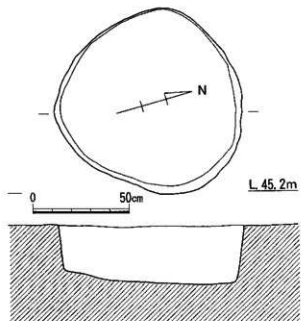
第5図 第61号 竪穴式住居遺構実測図

## 土 壌

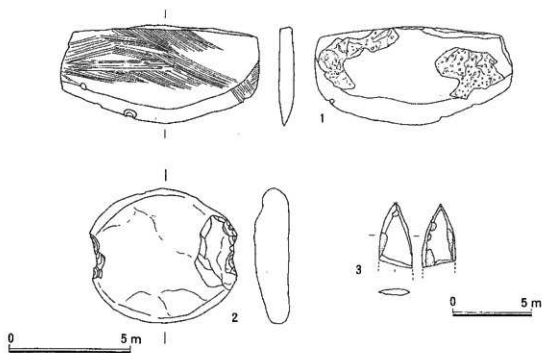
第5区南東側で検出された第85号土壌である。直径約95 $\mu$ mのほぼ円形のプランを呈し、遺構横出面であるアカホヤ層からの深さは約30 $\mu$ mを測る。この土壌からは、殆ど遺物がみられなかった他の土壌に比べ、多くの遺物が見受けられた。出土遺物は、打製石斧、石錘、台石、御領式土器等がみられた。

## 出土遺物

1、3は竪穴住居跡、2は土壌から得られた資料である。1は磨製石包丁である。一部剥落がみられるもののほぼ全面に磨きがみられる。刃部は若干外湾きみで逆へ字状を呈する。このタイプは当遺跡でこの1点のみである。2は石錘である。石材の長軸の両端部に、両面からの調整により抉りを作成している。3は磨製石鎌である。現存長2 $\mu$ m、最大幅1 $\mu$ mを測り、基部と先端部を欠損する。両面に剥落がみられるが、入念に磨きが施されている。



第 6 図 第 85 号 土坑実測図



第 7 図 出土遺物実測図(1・2 1/2, 3 1/1)



遺構検出状況(北西から)  
(第6区)



遺構検出状況(北東から)  
(第5区)



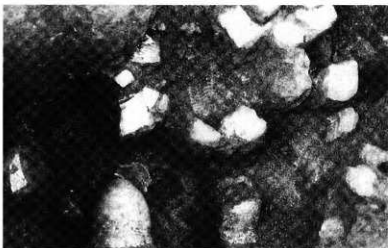
調査風景(SA61.62)  
床面精査状況



遺物出土状況 (SA53)  
床面から複合口縁壺  
が出土



遺物出土状況  
(SA53)



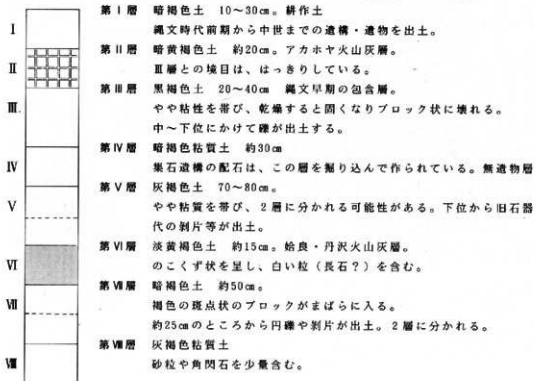
遺物出土状況  
(SK 118)

## IV 畑山遺跡の調査

畑山遺跡は、細見川の左岸、標高約45mの丘陵縁辺に位置している。調査は工事によって削平される約9000㎡について行った。

### 調査の概要

- (1) 層序 当遺跡で確認した土層は、大きくは8層に分かれ、さらに細分できるが、最近の耕作によって平坦あるいは段々畑にならされている。このため場所によっては深く削平を受けている箇所もみられた。詳細は下図のとおりである。
- (2) 検出された遺構・遺物 畑山遺跡からは、先土器時代から中世まで幅広い時代のものが検出されている。先土器時代では第VI層（AT）下層で剥片やチップ類が、上層では剥片尖頭器や剥片が出土している。第III層から第IV層上面では礫群や集石遺構を検出し、礫群は丘陵縁辺（調査地の中央から南）に非常に密に分布し、北側では密度は薄くなる。遺物は礫の間から押型文土器、石鏃、磨石、凹石を出土し、特に、石鏃はチャート・黒曜石・頁岩・石英質製など百点近くに及ぶ。アカホヤ上面で検出した遺構・遺物には、縄文時代後期の方形住居1軒（2号住居）、弥生後期後半から古墳時代初頭の住居5軒を検出した（1・3～6号住居）。1号住居では滑石あるいは流紋岩製の勾玉1個、小玉100個、2号住居では土製の勾玉や小玉が出土し、4号住居ではタタキを施した壘や磨裂石鏃・挟り入りの石包丁と鉄鏃が伴している。さらに4号住居では鉄の加工を行っていたと想定される小さな鉄片も30数個見つかった。また、発掘区全体に柱穴を検出し、調査時において十数棟の掘立柱建物跡を復元した。そのほか、土壇や竪穴状遺構などみられ、出土遺物には東播系銜や備前焼、青磁、土師質土器、滑石製石鍋片などがある。





畑山遺跡遠景



検出状況



縄文早期

礫群検出状況

台地縁辺部全体に礫  
石が分布している。



1号住居

床面は貼床



SA1 出土玉類

勾玉 1個

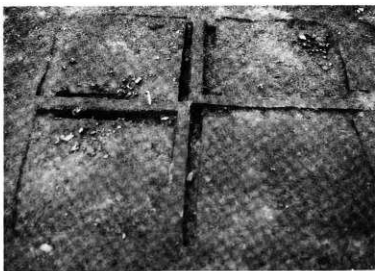
小玉 100個

(滑石あるいは流紋岩製)



4号住居（東より）

1辺約7mの住居  
焼土周辺より鉄片や  
鉄滓状の小片が出土  
している。



4号住居

遺物出土状況



4号住居出土遺物

石包丁

磨製石鏃

鉄鏃

すべて床面より出土  
している。



上南方地区遺跡

延岡市文化財調査報告書第8集

1992年 3月

発行 延岡市教育委員会  
印刷 な が と 印 刷